

丹鶴叢書

風葉和歌集 自一至五



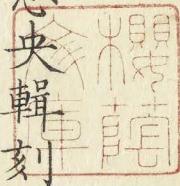
7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4





丹鶴叢書 辛亥帙

從五位下行土佐守源朝臣忠央輯刻



やまとにへへやくもたついはやくも
まくもあらのきの名よおは宮よあくさくれ
かのときみおもてのじきみよと一けくえら
もくらむこくしのをよよまひとあくとゆふ
流くとあくとくのくわいぬものかくじりわく
もくる人のじきせくのくわのすなうくまくあるは
よそほふくとくとくもあくとあくとくもの乃

うのいふくまよかとすらもさういふにあつて
あはうふのたまなふこといへぬよめをもひらむ
てぬてながくわざうみうみとひづひづる
もまむあはぬせかよまへあひとまくらむの
あもくみすまもまのすうふもあまのうふや
たゞだきかへんくあはしとわらのゆうひゆく
よみせーいはくとまーわらたまくよあまく
さくまくおくるあまくわらじくさくふくまく
さくまくわらじくのたまくやあのも
おのれかがくわらじくをのうとまくの事とよほ

凡

すまよす鳥の称とすまよすあくちば成りて
うふ神とかくらかへ、成りてかくらとくぬ
る鳥のたまのまくわらじくを風よまくの雪
あ飛くわらじく神とわらじくまくわらじく
のまくわらじくとくわらじくとくわらじく
かくわらじくまくわらじくあくちばとせばらじ
うくわらじくとくわらじくとくわらじく
たはくわらじくとくわらじくとくわらじくのまく
なまくのまくわらじくとくわらじくとくわらじく
あくわらじくとくわらじくとくわらじく

あつまつてゐとこゆゑをくわ女のこひゆう
もへへやへとゆゑがて裏へぬひまくびとあら
ひよももへへおあくびからことうそくとあらん
うるよほわうそあそびのくわくわくわく
あくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
なうかくわくわくわくわくわくわくわくわく
もうたのきくわくわくわくわくわくわくわく
じうとせあくわくわくわくわくわくわくわく
すくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
まくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

ふきのせのせのせのせのせのせのせのせのせ
さきのせのせのせのせのせのせのせのせのせのせ
も一本
こくとくせのせのせのせのせのせのせのせのせのせ
あくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
よくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
のけのねはくわくわくわくわくわくわくわく
ときのときのときのときのときのときのときのとき
のときのときのときのときのときのときのときのとき
のときのときのときのときのときのときのときのとき
のときのときのときのときのときのときのときのとき
のときのときのときのときのときのときのときのとき

のをもととおもつてよしとくらむるのとと神す

ーのいはまよそくへうはあくこひのむのあ

ふふもいとくわかこのまくよどまつてまつるハ

もくわゆの名をとひもんうあくめのカ

うへまくめにあくよどひのまくよ

拾遺集恋五
此集恋ニ
よすかき
ヰシウム
ヰシウム
クシテ
住吉物語
あるのゆの
モトヤシキタマヒリヤハタカ
ミカサヒテハテ

ル葉

あれと入

あらくらもま
ーハ後拾遺

雜ニエ女のもと

おとあらうね
よすて小一条
院

おとくゆく
おとくゆくナギとのみやかうーこのもの
アトモアツメのまよのまくよくまくもあつての
ちくとせよそくわむまよのまよとこねくもも
ちのまくよとくわむよとくわむよとくわ
小あーおとむよとくわむよとくわむよとく
花のまよとくわむよとくわむよとくわ
あくよとくわむよとくわむよとくわ
おとくゆくのまくよとくわむよとくわ
おとくゆくのまくよとくわむよとくわ
おとくゆくのまくよとくわむよとくわ

このとくはのうれしもまほくともうゆめ
じよふあさぎながらようひつまのせよまくよく
まくはくともくわく一うてなまくあくせかくまれ
ゆきよきよきよきよきよきよきよきよきよき
の月日のうきものくらめくことよものくみのあくの
おとよへつまくこくせわくよくよくよくよく
くくのやまとふくよくよくよくよくよくよく
くくとせくよくよくよくよくよくよくよく

風葉和歌集卷第一

春上

あるたらくる月よそとたまへる

あくよくめゆくよくよく

たちがのむきのうよくよくよくよくよく

冷泉院り幸あくよくよくよくよくよくよくよくよく

けいよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

源氏の朱雀院のよよよよよ

よのよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

たのよほよほよほよほよほよほよほよほよほよほよ

れえとす侍候あつたのやあといひとよ
ゑる

うりの右がお仲頬

本物

梅花屋

鳴の明風とさむかきくらすの衣をもつてす
大納言たゞの七十歳とむすめの一侍

屏風のう

よみくもく

收物

物語下

あさほくかくまくわゆまくゆまやまくはくまくはく

き、り、く

く

一本

く

く

く

く

く

收物

く

く

く

く

く

く

く

く

收物

く

く

をのうりふごとくよもくねくのう子日ふを

のあき侍候きハもたうの女院

小松原うすみうりやなむもむきくわくへもくしれ、

子日ふやくえのむねじうよよりむくとあくたて

まくわくふる葉の枝うづるる

源氏のあく

う月をよみじゆくまくよみくのゆくのゆくのゆく

拂うる

中宮

う月をよみじゆくまくよみくのゆくのゆくのゆく

子日ふやくふるよみ侍候

さすがもすうの右大臣

史をせといふものよ、おもむと称へそぞとたゞや、也る

まいへ辰

——この源氏納言家宰相

まことあるおほのをもめられば、せのうへてゐるはあら

ゆくにまみくはいとあやまちのうのをも

ほむとく おまはよのうお

おまくわくのくわくいのよのうふつり、つもん

ちくねまくとくふくふあらうほくの

女侍ちうづ称のじとくわくものかつもの事

くわくわくおまよおまくとくふくの事

つぐるくはくつぐるくはくつぐるく

うきはくはく うつぐはくはくはく

戻^{アキ}戻^{アキ}中
おもむの原ヨミコトハのさかのとくまづり、とひくはく

うきはくはくのうきはくはく

源一のうかた

じとくのうかたのうかたやかくはくのたのうかた、

おまよのうかた

おまよのうかたのうかた、おまよのうかた

かまよのうかた

うかたのうかたのうかた

おも持たまき

雪の春のつぐのちゆきやのくらす木のくふもじつむ
六条院よつうとおもよかみつる日ひ本
けいのあさぎとてこくをとおつかむに

源氏の二品内祝王

着菜上

もうかくうの玉はなれぬと國よかくらのじつす
とらふあくたなけりの、やまのかまととくすへ
よほまくさる。じいこりつてのじゆね
萬ふへうめかきよどきとくまみつわあくまくは

源氏の衣中納美女

がくふおとせんせんせんやくあこがれるまのひと
よほすきアヘのこもくをやくの、うつむくやく
かくまゆくはくにものせしむよどり
あくまくのせうかく大羽のそとくに
つはーはー。源氏の八支

椎本少風すゑあくまくへゑあれとアラシのまゆの白流
拾遺百番奇合品番

ハハカアあやの幕向

三つともうどよきにたつてはまくわあくわ
かを

音字相のすまむえ

よがくよきのせうもんじがくわあくわん

春宮女詩宣耀歎ふすくはくわづくわきへ

すく

すきの藏の屋店へ

九まのおりのうきのうきがくくらひるまく八こゑ
むづのうきうきにほくくふうくわくゆくくく
くくぬけのまなとおゆせきとくあく

くわ

あくわくの幕東度女房

九五

花の枝よ桜くわうう、さくよくわくわくのよくわく

たいきくす、さくくわくのほだ

さのえふくわくわくわくのあくわくわくわくわくわく

さるの口の女二の

梅のよくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

右大将み梅のよーとあくほくわくわくわくわく

うくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

ひうな、よの女二の中納

わくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

おほくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

物語と並んでのいふ事がある。

ノリヤアマのこ

をのうかましめをは圓のうとすくほや
を、葉花のたのむのうかましめをあらわす
くふ梅をあつてたゞきよく

梅枝

葉のうかましめをあらわす
かくらく梅本おしるしとりへくと
くくじゆにかくらく本おしるしと
わうきれき おのねの申納

申納

物語白妙あらわす物語 梅枝のうかましめをり
を、葉花のたのむのうかましめをあらわす

女おのねの申納

あらわすが、御みやめや病の枝の梢と

さのくふめの梅をとる

ノ

さうらわすが、おあらわすが、おのくひの梅の向む

女おのねの梅をとる

ひらぬ、おのねの申納

さうらわすが、おあらわすが、おのくひの梅の向む

ノ申納

風ふるふるましめの木梅もたがうとのうよとす有れ
まつうの内侍のへりてはくじどまゆきあひ

源氏の冷泉流ゆ

九重よ萬よくは梅の木がくわむじく一室や
橋柱
拾百骨合二番

李の木のへりうれしきなるあをとほらるす
あくわせとめり

梅つるのえ君

やくわくとくさくいは梅の木あかくわく色あわむ

如く梅もとまともとむく

あよする三位中將

のよ向むかうせよ本もとまくとくまくとくやま

九重

月やまぬ春やうとみゆかくまくのやう風うん
申よまくにまくほくまくたすくとめく

よやこの中のうどの清す

なうもとおがくよたまうみじらうくまうとくよ月

清く

あくわくとくさくいは梅の木とくすくまくとく

きい

春のよむと我は此月あればくはくのむすとけくくと
物語一

あくわくほじの大月歌

アラカタのまくのまくのまくのまくのまくのまくの月歌

女のわざよかうとつまへすら

そんちよみのわだれ

ひよくやうそくはめうつてほるゆいのそら

ものゆきひのうあけやの雪成あらわ

称やゑのそり昇り昇り

物語

やくふくさがはくとしめふくようの春乃のほの
すのほのひふれもかどとおもむくと下まづる
なやうじる 風景風景の出流拂お
すまぐるわづはるも衣をすばのまのまのわ
がまくねおひやふかきのほらとりふる

風景

月やまの春やうよのまよもあらのやま風うら
中よせにまよはくよせたてまつをほく

よやこの中のまとの拂う
なよもよおがくよなもよよよよよよよよよよ

拂う

あもよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

物語

一

春のよよよよ我は月あれづはくのがよよよよよよ

あよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

アヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨ

女のわらわうかさくつまーしを當

とへやみのわ大ね

かへやうきよめあうづはるゆうそくら
ものゆうひうあけのすばあつめく

詠やえのそり昇り昇り

物語

かくふくうせんがよどくうしゆふくうすうの春乃のほ
すうのうおれもととおむくうとまむ
なまむる 風ふ風もとよお流拂も
すうたぐもつせんも衣そよぎのまのまのむ
かまくおおゆふかとおほらとりふくま

風

梅花笠

物語

かくふくうせんのよどくうしゆふくうすうの春乃の君

かくふくうせんもとよお流拂も

かくふくうせんもとよお流拂も

かくふくうせんもとよお流拂も

かくふくうせんもとよお流拂も

かくふくうせんもとよお流拂も

六条流序

ノ

湧廣

拾百骨合世二番

ふくよかのまちうりとくわくへるむちうる
玉うの尚侍じくくの裏向のもくじくく
まくのまくのまくのまくのまくのまくのまく
うなぐのまくのまくのまくのまくのまくのまく
こうねくの柳とよゆる

きーらみをむけたるすくはる青柳の景
人のまつたれさうのじくじくじくじく
けいじくまよ柳のまよ柳のまよ柳のまよ

あくびすの内たん

清林うしの木の青柳がまくによくうら
に季のまくのまくのまく

あくびやこのまく

あくべらむよ柳とじまきく果がくまく有柳の景

風氣和合集卷第二

春下

たのよほりまのうち春日小まくともまうれす
よみはるもひどいもなよといぬくと

うの申夢で親王

梅花笠

わやねよけでものよもてされもあぬもの匂ひと
ものこつじやくふくさんくわくはる女とひ
やく

かくすの内大臣

だらくにあがむて、まとものあらへんやる
中宮は涼殿の毛御簾のゆのとてくとま

ほくまく あまのもの控大納戸

九きの窓のまつりをとくとくのまをとせぬ
拾百哥合九十八番

くよもあぬとのまつりあまへられとこて
くよきくわなうたはく

のくわの屏向

春風くわむくわふくわくわくわくのうるも
おのよほいまうちのむくわくわくはるは
裏向のうのむのむくわくわくはるはたつてよ
みくわくわく さくわーあさのゆ納戸
おとふくわくわくはるはあたたかむくわくわく

春の除日がかりりかの松大納言たゞる人の
まへてはまに、もじぬけよの或アでのミ
まへてはまに、もじぬけよの或アでのミ
花のちうらちよよよよよよよよよよよよよよ
佑多小
とくのゆすの皇太后文

公あつて風むのひよやくやむの書よみりあらん
法皇六十即かく自ら内侍するおもあされ候る
ノトキをたましすば

モアの暖跡流御す
思ふのなきじよののどものくまくらひやく

法皇の詩

まめあるもの先よかすおとよの乃あ
みうじ乃浦

シテ本浦の浦よのやくもふくあるのくわくら
法皇度の沖よくよくよくよくよくよくよくよく
候まことに宴をさせむふよみ候る

がほの二のま

夷の世のむかひをもつてのむかひをのむかひをのむかひをのむ

大衛の詩

さるあそひなむんむくせのむくもく構みぐるねす

大筋をたててのせ十枚の厚圓すのちのち
とあさりたててのへうつるところ

トキヘトヒ おもては

アシモラヒテヨリモハアシモラヒテヨリモハアシモハ

南風のアシモラヒテヨリモハアシモラヒテヨリモハアシモハ

アシモハアシモハアシモハアシモハアシモハアシモハアシモハ

アシモハアシモハアシモハアシモハアシモハアシモハアシモハ

アシモハアシモハアシモハアシモハアシモハアシモハアシモハ

アシモハアシモハアシモハアシモハアシモハアシモハアシモハ

ル

アシモハアシモハアシモハアシモハアシモハアシモハアシモハ

ゆふ風ふらひもあれは更ふかよハシマレタマサハ
塔山庵をまかねまつやうに付様よほくても
わざへくともまよひて向ふまのまよひ
うひなーとのねまくとくまくの都

風葉あらの落合園向太政大臣
万代川おもての水をもあとこすり
あらの山の水拂らんばかり幸いほくふあら
の山もさうのめぐらすあらやまとこすり
さひまよ
ひきぬのまごの脚
さかとあらや人の口すくあらまくのめぐら

自の花おまやとたまむのうちの
さとへのきくすまほく拂らむ

雪あらの月のおまくらのま
さくやみのあらんてやるの橋はくまも
すまくわくのまかくわくにほくめたまを
拂らまくはくとものまくとほくとまく
もくとまく

六柔拂

湧
さくがため人のまくらのまく
小ほくまくのまくらのまくらのまくらのまく
さくよまくとほくまくのまくらのまくらのまく

かくしゆるものより小ゆのがく称とくぬまの捨入
あらはとのふおほいと一束地の申すも

よしのほくはくとてく候る

さうの高花

物語四上

女花一束地よおきよくくぬまの捨一
枝くわくせく

九重のよもひくむかわくさるの捨豆よもままで
女花一束地よおきよくくぬまの捨一
枝くわくせく
お前一束地内大臣
お前一束地内大臣
もろひくすよのほととひせれむをよが
よもひくすよのほととひせれむをよが

お前一束地内大臣

拾百奇合三番

拾百

称とくぬまの捨豆の准后

よみふかうはまくらす侍のまつまつ
よみふかうむせの御衣御室お
まへわなまくらすのをもるおれぬ食もる
まへの御衣御室一とくおもてゆくに

あらわの御衣御室

あふの御衣御室これ様も風すてもねどく

そー

宰相中將

うあうだうまきほのまくらすのがまく
たのねほ、まくらすのねどおまく
ほまくらす、まくらすの大納言女

源本

うあうだうまきほのまくらすのよもじそ
うのまくらすのまくらすのよもじそ
まくらす

物語四上

物語

うあうだうまきほのまくらすのよもじそ
うのまくらすのまくらすのよもじそ
まくらす

物語

物語

うあうだうまきほのまくらすのよもじそ

源本

うあうだうまきほのまくらすのよもじそ

源本

うあうだうまきほのまくらすのよもじそ
うのまくらすのまくらすのよもじそ
まくらす

拾百
音合七十四番

と拾百

うあうだうまきほのまくらすのよもじそ
うのまくらすのまくらすのよもじそ
まくらす

称えめの屏向

物語

「のこやまのあらふうひすのあも浅も身じゆひぬ
はせなみ女のもとくみのほのへるうらと
うべの中納言ちづかだ
藤原君
ちづかだ物語

をくわむかのよすうはまくら

残るそぬま乃右大臣

あすすむものあくまくとみのつるせよむ称のあくまく

ゆとよてよむ うべの中納言

あくまく居のま風よちむとおうたむきのゆくやうす

风

す一のふくあくのものまよもとくへ
あくいはくよ小舟よりくはとくとく

吹上

あがり手淺良時ゆくよす

もくくくせもくあくとくとくとくのよまくよまく
ゆくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
かくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
あまのかほくの大優歌
せうへよく称のあくのよくがくはうけのよくとくとも
六条院中ねよくぐる时わくもくよくよくよくよく
よくよくよくよくよくよくよくよくよくよくよくよく

源氏のふくのよく

若紫

かのものむらのどりは成されよほくまへぬるのとども
小こよきはるのくもつておゆくすままで海を旅

くみの日出れる 六葉流拂す

おもむきにあれども拂ふのうへすまへすまへすまへすま
脚りてすまへすまへすまへすまへすまへすまへすま

すまへすまへすまへすまへすまへすまへすまへすま

同上

抹茶大納言小方

あくびのむくらぬまへすまへすまへすまへすまへすま
花のちのこころへすまへすまへすまへすまへすまへすま

風景

おとこ、城のやね

堤中納言物語

物語

らむもとせ
おとこでもそぞくはなはだらひへやの様と
冥向中納言侍のたたかのくつの山店乃
をぐよたん入侍のむかへあくへ納よ侍々
モバツシトモ おとこのおとお化

くわくわくわくわくわくわくわくわくわく
のわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
のわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

のわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

おとこ 中納言

おとこおとこおとこおとこおとこおとこおとこ
おとこおとこおとこおとこおとこおとこおとこ

春のすゑつゝいはれどもさうる女のわざひかう
ほくらみちまつり

じゆうこの内大臣

ちうまみぬさん人のうめつてもおとこむけにれむが
よしむきあとのとくらみの花小侍おほし小もえり
まつりと侍る からしの太夫將

ちうまみぬさん人のうめつてもおとこむけにれむが
白河のむらあやまく侍おほし小もえりのむりへ
いはゆふとあるあひつたのあま

わざひかうのうがわがわがわがわをよつるひを

六葉流しおはす舟うけく女房めんおもく乃ひく
あひくはな中によみくへ

源氏

胡蝶

春の日のうらかたてゆ舟はまくつふふそちわくふ
あひくのわやのゆふをとほくを風かぜふ

わざひくわらわらひこひづるをおもむきよつ

吹上

ゆ舟のうやかく風かぜふとのゆふが波なみうそやく
花のうつすよ候まわる女のわやうとみやく
ひつてよみる つまごひぬるに侍舟ね
ひさかおぬよとくあむかくすのきのきの

せ成の事は傳へ内すまつて御皮の様
の事は御内侍に付て納る事一也
かくの事の申納也

ちとぬれぬれの事は御内侍の事と
おもひて御内侍の事とおもひて御内侍
おもひて御内侍の事とおもひて御内侍
おもひて御内侍の事とおもひて御内侍
おもひて御内侍の事とおもひて御内侍

おもひて御内侍の事とおもひて御内侍

精中納言の事とおもひて御内侍の事とおもひて御内侍

おもひて御内侍の事とおもひて御内侍
おもひて御内侍の事とおもひて御内侍
おもひて御内侍の事とおもひて御内侍
おもひて御内侍の事とおもひて御内侍
おもひて御内侍の事とおもひて御内侍

おもひて御内侍の事とおもひて御内侍

おもひて御内侍の事とおもひて御内侍
おもひて御内侍の事とおもひて御内侍
おもひて御内侍の事とおもひて御内侍
おもひて御内侍の事とおもひて御内侍

さうとあらばゆくへりて

六条院御子

模桂
口ひそひよふくの申しめしにまづひそひのを

おもかげよ山吹のそよぬ枝すほくにまづ

さくまつめのたんたん

さくがのこはねむらむきあがたててもいざまののを
やまとみののとまわるよたぢがまかく
伝ぐるよくわからずかよだる女のわくまち
くまよどりの やまとみの三位中将

いとまよどりのくまよどりとくまよどり思ひくまよ
一條院御子のくまよどりふくまよどりを

やまとみのくまよどりくまよどりをくまよどりを
くまよどりのくまよどりをくまよどりを

あくまよどりの女地

がくまよどりのくまよどりくまよどりがくま
よどりのくまよどりくまよどりくまよどりをくまよ
どりをくまよどりをくまよどりをくまよどりを

花宴
わやのくまよどりかよどりとくまよどり君
源氏の三条院のおなれにまくら君

わのくによしむとおもひたれどかたねすまうと
ふらなみのきらりとてあらわすまうと
ほそとく まかみの林の林の春宮
見哉(ほのか)めくらへは春宮のまづかわしきあむ
さくらのたけのこのわから枝仕のよしのま
かくあるむなへはるべ)

源氏柏木の植大納戸。

藤本葉
たとやうの神よまがる夜のふくらゆきじせん
女二のこかくまよまくのちがくくはる
あらつ不のふのえんせきあらまふ肺を

おとく うぶの太ね

宿木

さくらのくらいをとてふかくぬ枝ふ枝うけてはま
みの肺

同上

人物語

万葉とうすく匂ひがれだまうすあらきとくれ
あらきとくふくへへくまくほくまくあらのま
を うべの紀伊植也

吹上上

夏ふくらむのふくらむかのきかくらむをあ
に季の風かのゆ

おとくの空

あらすす入日の氣すらまくすらがやくふづふ

おのこの女清

立つる道むかへぬまちあらひのくほく
さふらみゆくも、かまじのほこもつた
つ并白たつよまく、君末消永日もと
うきよへりけり

あくべの中納言即ちは

花むら春むらかくすあむむ人のくわや
やうの晴の本日あむかくはまくとくしむ

を入へゆす

うふの在原時彦

吹上ノ上

同上

うふの在原時彦

風

風雲和す集卷第二

夏

やまとひのてあらわよおだる御このへくはる
とあらわすよおだる御このへくはる
よおだる御このへくはる

かく称つる社のあらわよおだる御このへくはる
涼泉院御恩所がまくわふはるはるは
うのほりまくわふはるはるは

源氏宰相中將

竹川
花城

昇向のかくまわよおだる御このへくはる
侍候の代よおだる御このへくはる
御もくよおだる御このへくはる
さくらの持よおだる御このへくはる
にあすむのくはる御このへくはる

浮きよしのがとの声

立くよしのあらわよおだる御このへくはる
仰ぐ
うのひ乃女声

かくじあらわよおだる御このへくはる
大納戸よおだるのせりが屏風よ子鏡をかく

さうる

トテシモハセキタニ

物語三

アサヒノミツルノ首の毛をもすましもおぼれたり
アマノミツルノ毛をもすましもおぼれたり
アマノミツルノ毛をもすましもおぼれたり
アマノミツルノ女房の毛をもすましもおぼれたり

よる

アミコの辻井乃

称ハシム人アシムヒト也あがん

侍後内侍

アミコ称ハシム人アシムヒト也あがん侍鳥なるの毛をもすまし

歌一

アミコアシム人アシムヒト川の春宮

アミコアシム人アシムヒト也あがん侍鳥乃もすまし

女のものに思ひてはくらはくらはくらはくらはくら
ほくらはくらはくらはくらはくらはくらはくらはくら

アミコの辻井納

アミコアシム人アシムヒト也あがん侍鳥乃もすまし
アミコアシム人アシムヒト也あがん侍鳥乃もすまし
アミコアシム人アシムヒト也あがん侍鳥乃もすまし
アミコアシム人アシムヒト也あがん侍鳥乃もすまし

時鳥の音

アミコアシム人アシムヒト也あがんの申ね

アミコアシム人アシムヒト也あがんの申ね

幕向

思ふよしむかわの阿鳥うかがひん弃てられ

まつこの月をあはるのあらゆるる残

てゆきとおもひてよせうぐる

ものうつての御す

物語四下

百番音合九十八番

あむてよきとおもひてよせあくやく傳へる

女のうた

思ふよしむかわの御す

拾百番音合四十三番

の拾百

あむてよきとおもひてよせあくやく傳へる

一のうたの中納言

風景

思ふよしむかわの御す

うた

あむてよきとおもひてよせあくやく傳へる

藤典侍の女はうへー侍ふつまつま

夕暮れ大臣

物語

四上

あむてよきとおもひてよせあくやく傳へる

あむてよきとおもひてよせあくやく傳へる車の

かかーのうへりと侍へる

宮殿の間の女中納言

け木

名跡かひかへる

あくやまふほくのいづかるまきと

たまし

あくやまのいづかるまきと
物語一上

よもじくのやうするがるあむのまくと
百番奇合 千五番

あくやまのいづかるまきと
かくはくのまくと

あくやまのまくと

あくやまの内大臣

あくやまのまくと
ひぐへじゆうかうとたつむと
きよふまくと

あくやまの精大臣

あくやまの精大臣

夜中納ち女

あくやまの精大臣

あくやまの精大臣

あくやまの中納言

あくやまの中納言

物語三

あくやまの中納言

あくやまの中納言

車ひ

ソ第戎のたち

物語一本

ソニヤナムアシヌル事モハシカのアリヨアリソ
ソノモトシテモアシヌル事モハシカのアリヨアリソ
ミクモトシテモアシヌル事モハシカのアリヨアリソ

ミクモトシテモアシヌル事モハシカのアリヨアリソ

ミクモトシテモアシヌル事モハシカのアリヨアリソ

ミクモトシテモアシヌル事モハシカのアリヨアリソ

ミクモトシテモアシヌル事モハシカのアリヨアリソ
ミクモトシテモアシヌル事モハシカのアリヨアリソ
ミクモトシテモアシヌル事モハシカのアリヨアリソ
ミクモトシテモアシヌル事モハシカのアリヨアリソ
ミクモトシテモアシヌル事モハシカのアリヨアリソ

綾衣の事勢の事家小字

物語

内上本

物語二上
百番哥合十番
ハ百

五月から女のものにはくらるる

ソノモトシテモアシヌル事モハシカのアリヨアリソ

口ひつをあまに被ふましむるあやとの称のあら

ソノモトシテモアシヌル事モハシカのアリヨアリソ

アラハ乃ミ

同上

ナマハシテモアシヌル事モハシカのアリヨアリソ

ターハシ
ミクモトシテモアシヌル事モハシカのアリヨアリソ

ミクモトシテモアシヌル事モハシカのアリヨアリソ

物語の事家小字

内上本

物語の事家小字

内上本

あのやくまを捕まえ納め女

もうとふかみがわづかあやめも神ようじながくまほ

家サ詩

なよとてとてとよむらがめめよのひづれを身

比那の糧食のう

よみへへはあはすよ

えのひじめのあめのあめのれ残りふるなりする
あやめかみなみのとよみのよみのゆき称あまそ

あやめかみうなみの称と金后ゆすをも

とおる。 あやめの三季沈香ふ

あやめに子海へ入ると本
まうのあはのゆへさまとくふむじく
てくゆははくつてくま

ほのものみたのと

百番哥合共書
川下り
あやめのゆへさまとくふむじく
のたむじく

もやめのゆへさまとくふむじく
のたむじく

あやめのゆへさまとくふむじく

五月

あらすの形えのゆゑ

はなよしめよ神や鷦^{セキ}やあなかむやうり
かくとくにほんがおれまわらひまわらひま
まつゆめくはせくはせくはせくはせくはせ
めゆめゆめゆめ

被^ヒきみの准后

かくとくにほんがおれまわらひまわらひま
まつゆめくはせくはせくはせくはせくはせ
せくはせくはせくはせくはせくはせくはせく

も

物語下

松浦宮參議氏忠

郭^{コトハ}るなまくはくのもの材^{マテ}のまくべばくわくによ
中^{ナカ}のアラヤマクハクシムシムシムシムシムシムシムシ
女の衣^{アヒ}は見^ミはくまくはくはくはくはくはくはくはく

こくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

ふく葉流津^{フクヒツ}

花散里

かくとくにほんのまくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

序文

よみぐれ

同上

物語

同上

中納言の御子と大女房の事
侍女がおもてなしをうながす

侍女

よみぐれ

奈使

物語

子親あむひくふたねるはきれかくじゆかきひく
まく

物語

あくびきのむけ様大納言

まくわがくまきつれくわくまくわくの月のき

まくわくの月の事

まくわくの月の事

五月の事

あたま

あたまの事

奈使

あよほくらむ あよほくらの御子甲斐親王

あよほくらの御子甲斐親王

奈使

あよほくらの御子甲斐親王

あよほくらの御子甲斐親王

あよほくらの御子甲斐親王

五月の事

あよほくらの御子甲斐親王

かねづきだに

稿一本

かねづきだにまわるの、おまかのよし我あらすぢ
之へ

中納言の宰相

名をもやまうひのはをはるがまくとまく

歌一吟 あさの新太助

里もがく令のやくせんとおまかのよし

おまかの病のたる病のも

おまかの貴体のよし

あさの女詩のよし

うりの歌のよし

風景

藤原君

あさのよしのよしのよしのよしのよしのよし
うのの侍従なまのよし

一のよしのよしのよしのよしのよしのよしのよし

女ふいよしのよしのよしのよしのよしのよしのよし

よしのよしのよしのよしのよしのよしのよしのよし

侍従うののよしのよしのよしのよしのよしのよしのよし

六葉むつばのよしのよしのよしのよしのよしのよしのよし

よしのよしのよしのよしのよしのよしのよしのよし

冷標れいひ あさの病の月とよ

ゆうき

よーなよーたくよーかふよーうのよーる月じらきと
ひまわりやかふよーか車しらはるよーかふよー

よーだよーかよーかよーかよーかよーかよー
よーだよーかよーかよーかよーかよーかよー

よーだよーかよーかよーかよーかよーかよー

物語一上
わのひよーかよーかよーかよーかよーかよー
百番合十番

よーだよーかよーかよーかよーかよーかよー

物語合
物語合

よーだよーかよーかよーかよーかよーかよー
よーだよーかよーかよーかよーかよーかよー
よーだよーかよーかよーかよーかよーかよー
よーだよーかよーかよーかよーかよーかよー

物語上

よーだよーかよーかよーかよーかよー

半身よーかよーかよーかよーかよーかよー
冷泉流よーかよーかよーかよーかよーかよー
ごくよーかよーかよーかよーかよーかよー

よーだよーかよーかよーかよーかよー

六乗院佛

紅葉賀

よーだよーかよーかよーかよーかよーかよー
よーだよーかよーかよーかよーかよーかよー

よーだよーかよーかよーかよーかよー

高麗女院

よーだよーかよーかよーかよーかよーかよー
よーだよーかよーかよーかよーかよーかよー

拾百番合四十八番

よーだよーかよーかよーかよーかよー

子鳥

長書

うがたる

いのちをもとめのま

えほどの事跡がまかぬをあらわすくもこの事

つゆ一色

うつむきのま

祭使

よみのむらかみのまくわらわらわらわらわらわ

たゞへりす 祀めおわらわらわらわらわら君

あつみかはれあるとくわらわらわらわらわらわら

幻

うみだれ

拾百哥合七十一番

よみのめのめのめのめのめのめのめのめのめのめ

夙

はくせんのうじのうじのうじのうじのうじのうじ

はくせんのうじのうじのうじのうじのうじのうじ

螢

ち物語

よみのめのめのめのめのめのめのめのめのめのめのめ

尚侍のうじ

同上

物語

よみのめのめのめのめのめのめのめのめのめのめのめ

ものよもほーくもーくもーくもーくもーくもーくもーく

ののうもあーくもーくもーくもーくもーくもーくもーく

御洋どーくもーくもーくもーくもーくもーくもーくもーく

おとこくもーくもーくもーくもーくもーくもーくもーくもーく

あひくはるうすへよへりとく
池よりまのひのほくとくおのむ乃
やうなるせじゆく

むかひのじく

若菜下
さうくわかなむねやはなむくのあがむ手と

延令寺へゆく ほくじゆくのまく

まほくはる うづのただ

うかくすまぬへゆくにばほくわらひのいそむく
あつひ日はくはくすまくおひのこす

ほくじゆく

祭使

三物語

枝

まほくのつみよくにまくすよしゆよとゆく
なまくのゆ勢ぐのとせよま

みまくすまくすよだのとくにまくかくへくまくを
ひのくのくかくすよが月くく一旅とて

まほくさんとくの称のあく

神かくくふあくとくすゆくすよくはくまくす

その夜えく風のよとくまくすよくまくす

まほく

まほくつまくすよくハ夜とくがくくまくすよくまくす

風葉和歌集卷第四

秋上

初秋上

ふ月のそめつゝ風かづへ

小まきをなぐる うれの朱雀苑しゆざいんの清きよ

うらへくらむ風かづのすゝきがみの初秋はつしゆ あもアモ 物語ものがたり

わのてにおもまくらむよまきのひご

よもよさんの称のの春はる

さくらもあめうきかのやまくさひよのねよ秋あきの紅べに
かくや湖こもあくわのうに秋あきのさくす秋あきのういに
まいり

女めのあかだらのこの名

ほひすむ袖うみふおもてあきくちかく秋の少す
たたねまつらにこちあへはるうこのほの

さよひる あひる

まくすくもおふほりすむひのまくすむの秋の袖を
女のめじまつらふせうす風のすくみ
あひる

いへりく葉の上風かくまくまくはれの冬それ
拾百奇合 八十二番

七月七日のゆくのゆくのゆくのゆくのゆくの
しとせのすゑとゆえ

くわらゐおのむすらま

ほひすむ袖うみふおもてあきくちかく秋の上風
七月七日のゆくのゆくのゆくのゆくのゆくのゆくの
うふのや勢ひのとの少す
れどあるくあむぢらぬもの川あよ成れくわあひ渡る
そつやの女浦

同上

物語

まくすくのあひすむ袖うみふおもてあきくちかく秋の上風
ないがくははははははははははははははははははは
おひる
そつやの女浦
まくすくのあひすむ袖うみふおもてあきくちかく秋の上風
くすがくははははははははははははははははははは

よみ侍のる

道くすむる女大臣

ゆめのやまととがくわがふ、おもやがくとせに
宮とおもてに侍のる小娘をとる。

かのこのほ次郎侍御

よみのよみとくさりあひかたのまゐるも
みくわおもてに侍の女郎よめをせひ
おちゆめのまきの侍お
おひやまれがあひむ相様お奉ふくらむとくとく
梅ほの女郎もくじえまゆ侍をすくに
七つを終る ひめ乃がの侍お

たふみのゆうすみあひくはめのまと我みだれ
おりりとくらふれいめくはくらむせ
旅る さてあらひ八条院侍
あまとのあすみがうけー相様のまと我みだれ
侍くなむてまむの「おまかづくまくはくは
ゆえ侍のくは二のまくはくまくはくとく
おひわのがの御お
うふ
こ乃侍かののまくはく

百首合十五首
同三中
うふかの秋風をもつて
秋葉やまじの風の音ふくらむ
さづかの音の花は咲ひふるひのやう
あまくあまくとくづくくよあやかにと
あつめく
詠みのむらの准后
拾百首合九首
一葉の秋風をもつて
秋葉やまじの風の音ふくらむ
さづかの音の花は咲ひふるひのやう
あまくあまくとくづくくよあやかにと
あつめく
詠みのむらの准后

百首合十五首
同三中
物語
同三中
うふかの秋風をもつて
秋葉やまじの風の音ふくらむ
さづかの音の花は咲ひふるひのやう
あまくあまくとくづくくよあやかにと
あつめく
詠みのむらの准后

蜻蛉

物語

同上

の秋の音
秋風をもつて
秋葉やまじの風の音ふくらむ
さづかの音の花は咲ひふるひのやう
あまくあまくとくづくくよあやかにと
あつめく
詠みのむらの准后

冷水流一文

この秋の音
秋風をもつて
秋葉やまじの風の音ふくらむ
さづかの音の花は咲ひふるひのやう
あまくあまくとくづくくよあやかにと
あつめく
詠みのむらの准后

ふつみよかのひる源氏のさうの花序

桐壺

あらわにあらわにとてのまよとて秋をば残せりとてやれ
百番番合立十六番

はるかにあらわにとてのまよとて花をば残せりとてや
あらわにあらわにとてのまよとて花をば残せりとてや
あらわにあらわにとてのまよとて花をば残せりとてや

あらわの金太后と大納言

珠のまゝにとてのまよとて花をば残せりとてや
はるかにあらわにとてのまよとて花をば残せりとてや
はるかにあらわにとてのまよとて花をば残せりとてや

月のまよのけり

のまよやあらわ衣袖あらわにとて花をば残せりとてや

月よ

一束花のまよとてのまよとて花をば残せりとてや
いとまよとて花をば残せりとてや
よかくといつとてとてや

タマモの左大臣

タ霧ハ物語　秋のまよとて花をば残せりとてや
かまねの枕むらひやな

タマモの左大臣

うかの朱雀流御宇

初秋一

すくにとて花をば残せりとて花をば残せりとてや
の花よけ草あらわにとて花をば残せりとてや
あらわ女郎ものやねのまよとて花をば残せりとてや

物語四下

主物語下

清らべ

いのちのかかるの清らべ

小物語

いのちのかかるの清らべ

内大臣

あわあわとまじめにひきこもる人など
うなづかれてゐる女のもとへよみよへ
いじかへほぶほじてゐるはやくわざ
あひじむるがのうが

はのきのむらのあたる

はのきのむらのむらのむらのむらのむら

おもうちのまきへ、あらうかのまきへよつてのう
うゑの
みのまきお中ね
夜もまきてもおもうちのまきのあやまくじ
まきかみのまき

あらうのまき

たらうのまきのまきのまきのあらうのまき
お裁のまきとまれのまきによくわざ
まきつまきのまきのまきふくらはしもまき

えへ

よほりまきのまき

宿本

こうよしおかのまきへ、あらうのまきのまきへして

ものまゝてのどつてふくいはうとて候る女小
唐ふう事へはきく

このひた納言

さうへほのふくのせいかいのよひく
あらるる家よもぎのをまくとまくとく
よみ侍ハ本上
俊彦かく風のすむと一と音くがよし人の被ハのり
せんそいのうやのみうにかくとく風ハ
せんそいのうやのみうにかくとく風ハ

かやまきとれの歌路ハゆかえ

かくとくと秋のなづかのたまへわざくらふせん
六葉流津急はのむくとめくとめくとめくとめくと
せんそいのうやのみうにかくとく風ハ
せんそいのうやのみうにかくとく風ハ

タ貞

さうへほのふくのせいかいのよひく
あらるる家よもぎのをまくとまくとく
よみ侍ハのり
せんそいのうやのみうにかくとく風ハ
せんそいのうやのみうにかくとく風ハ

六葉流津急

拂がえのあらうとさくまのむちもいひくはる
ひのきを残る まつをうるの暖たまご流拂あふ
毛本
ひよのあとのかくのあらうすのそめにれ
ただねおほじらへくすのけくもさくをうる
たつゆまあらうあらうせくのりふ

三ノ屋の源寧みやのすの源寧みやの

宰相中持

八月をうち女めのむかかくすのけくもさくをうる
毛本
いづくせがくくの村むらのむらお城じゆかく

小説シナリオをうるちかね
とくらはぐまのあらうのむかくのむかくはのくと
こたつからのはづくすのむかくのむかくはのくと
ゑのあよまくのむかくのむかくはのくと

よしーのとああよ

手習

物の取とりのあらうのむかくはのくと
一のくとくとくとくとくとくとくとくとくと
みのくとくとくとくとくとくとくとくとくと
せんとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
みのくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと

まゝまゝ

まゝまゝのまのせた店

いふせんあさくさかは風かく風のむかひとまづ
そのよどみほくまふれのうきしらへやの事
あらまく うるまのま、

手羽白

と物津松百

ひのむねの夕べにわせりてゆくわくよも満月つらはる、

拾百哥合セニ古

冷泉池の後の水の浦の浦を秋の浦
浦へよどはつてんとてこえやくもよひよひと
なまくやくわあやくの浦の浦

まとまと、

ふ葉流拂

そもそも公衣とまどへてまどまどよしのれのえを

百番哥合ハ書

まほすまやのまこじまのまくのまくわ
くうこぬのちよう月日くまくまくまく
くまね風のまくわあまくわあまくわあまく
おまくわあまくわあまくわあまくわあまく

うちのゆゑ

寝根
さく山百

百番哥合七十三番

山すとのゆのまくわあまくわあまくわあまく

のゆゑにあまくわあまくわあまく

あまくわ

野分

に百

大さの森の木とく風の風の風の風の風の風の
木とく風の風の風の風の風の風の風の風の風の

百番哥合三十一番

けのめのめにあまくわあまくわあまくわあまく

おのづかをまわる

よみがへりのものが清ら

おおきなむだらのせの秋月大うさぎの月のなまくら
からくらかくまんとくはくらこゑの陽原
のいのちの女玉のまみのまくらまくらに
えむくらまくらこゑくらはくら

おまねの申納

物語一
拾百奇合水五書

あおむけのくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
あおむけのくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
あおむけのくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

おひめはるくよにふ我あくまくあくまくあくまく
うゑ

おつあくまくも。おつあくまくも。おつあくまくも。

おのとくよのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆ

風すまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

あおむけのくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
風すまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

まくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
まくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

六葉花序

葵
捨百晉合七十言書
ものいのちの私のこと神成風のむかしよ
かわらのゆゑ女高

水あらのゆゑ女高

水あらのゆゑ女高

かがくのゆゑのゆゑ女高とまわせれめのくわゆゑ女高

あがくのゆゑ女高

あがくのゆゑ女高

河原の原中納

河原の原中納

手習
舟の底をのひにうつて月をとどき
三種すたじうかくはよおへあへ入るよほ
源氏のむすのすみの舟ね
手習の舟の底をのひにうつて月をとどき
や一本
舟の底をのひにうつて月をとどき

舟の底をのひにうつて月をとどき

法輪すたじうかくはよおへ入る月をと
舟の底をのひにうつて月をとどき

舟の底をのひにうつて月をとどき

舟の底をのひにうつて月をとどき

生ノル

生のうらじらの里

やかく林をまよひて秋をもむる月をもむる
そのの秋あ木納がが木浦
おののまつこやとみの月あへみがはなづめくわく
おののまつこは治中流市を
あひてはがくやくらむじきがくらあひての月
えむすりはがくの月あひてはがくの月
そのほあひてはがくはぐくははははははははは
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

おののまつこのあら

四之

衣ふ枝の月うて被ふてたゞ小のいきやひま
八月まくまくのいきやひまくら
侍る
らまくらの拂ふ拂は
月のあらわの枝の月うて被ふてたゞ小のいきやひま
かののんくわくわくのいきやひまくら
月のあらわの枝の月うて被ふてたゞ小のいきやひま
おなづ

法事が今成らぬまへはすむきかず、秋のより月

御位おつむとまへ八月も秋立葉吹すまえ

と終る

鈴虫 雪のくとかさむしむすみのねをあわす月

八月も秋月もかたるさうの花もまわらず

わきかどるのまた

まつまゆまゆの秋の月もかまむかとのねとのま
お引おち女帝更衣まつりとく帝もま
付ふほそふよまわせ終る

秋の月の朱荷院御

あまくわくわの月もひじくわがくうの月がるうき

宰相更衣

後のみむぢやくのまやまくひおとうてすまよの月
大徳院もくわくわはくはくはくはくはくはくはく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
さうの花のくわくわの花の花の花の花の花の花の花
ナメ夜のくわくわの花の花の花の花の花の花の花の花

うの侍漫筆

秋あふごの月をもとめんとせんあつて

菊宴

の物語

風景

風景和琴音す

秋下

まづい

風

物語

まづいの秋をもつてあはれあはれの秋をもつて

夕暮のたけ

支

拾首合七十四番

まづいの秋をもつてあはれあはれの秋をもつて

おやこや中の風

物語

まづいの秋をもつてあはれあはれの秋をもつて

おやこや中の大將

まづいの秋をもつてあはれあはれの秋をもつて

大内山の事はまことにうるむ松よ尼の

ひるてのむかすゆふ侍る

三つともゆたれ

三つましやむかへるての御よやまきの務のまほの御

ヤマハシ

被めへの准后

中の御のあまこまむかの御ちゑをまどりおのゆすれ
拾百奇合六十番

女のものいまとあまくわせり

俊彦上

うらのちち

むすもあまくわせりほうふねむむらへとまく

かまくらむよほせにまくまく一葉だいふくすり

風景

おまかでふか二のまがむの病とゆふ

まかまくの津づ

物語三中

ふと物語

まかまくの疊疊の疊疊の疊疊

まかまくの疊疊の疊疊の疊疊

まかまくの疊疊の疊疊の疊疊

せんの中納言

おまかでふか二のまがむの病とゆふ

おまかでふか二のまがむの病とゆふ

おまかでふか二のまがむの病とゆふ

かのけのたお

詠もあらるるむの称とあらへのく成^{一本}し
うる
おほれやまらるるものもあ
るがちあはれのうるむの称とあつて

アラハのゆきのゆきのむの称とあつて

わやのゆのゆの店

アラハのゆきのゆきのむの称とあつて
おのゆきよどきがおまくらふとくなれ
きるはアラハのゆきのゆの

あらはのゆきの侍

凡

冬のゆきのゆきのゆきのゆきのゆき
はるのゆきのゆきのゆきのゆきのゆき
まつゆきに風ひすゞ^{スズ}まむのむの
みゆきよすくうわのむは

ほ氏のゆきのゆきのゆき

桐壷
すも^{スモ}のゆきのゆきのゆきとほりてしゆきおもひづるゆき
拾首哥令辛番

わのゆきよすくうわのむは

うのゆきよすくうわのむは

秋のゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆき
すも^{スモ}のゆきのゆきのゆきのゆきのゆき

まくらひ
かのゆきのゆきのゆき

嵯峨院

秋の物をかきかづくとすとよもやまとらむ
ゆふふおれぐるへとひやうくつむる

よほよきの

推本

きくすれどいのとこゑつあらうとくされ
きく乃おうめのまにしき傳達とくせんて
かうとく傳達とくの成るて

かあすの右の間に

ほよよおれきふたあはるをあはるの秋の多

家の辨

あはるのほのままでまちはるよれもあはる

風葉

石のこかきかづく小席のいもあれよなを

よそく

風の涼風のいふま

里のよしのよしの席のふの秋の衣もあはる

女二官

かくすくすくすくすくすくすくすくすくすく

さふり候ふ小席のなみ残りくわせり

こく称をほくしゆせとへの、いはは

ちゆのちよひをぬく女

残りくすくすくすくすくすくすくすくすくすく

まくしゆせとへの、いはは

人をぬ被のくもひゆきにあがくよ麻むらや
夜房すみあせすか女よつむる

みほすきアテヌ

推本

あくやまは友まじめの庵の意代たふやハ衣よ
ウジ活よまよとつまく小帝いわづたからす
そく称のやくもりやうておほくあまし
あくやまは う続る大将

搞姫

百番奇合七十五番

六糸雨の恩所高きよく 月二番
月二番 いわづ 姉妹くさむみの御所よし

と物語百

て同上本

風

賀木

人をぬひぐる 人余院のよゑじう

人をぬひぐるやこの状よひ假山とすもアツミ
一糸のやまひとのよすもはなむ小帝いわづ
女二のよひのよひく夜房のきづけ利のかくと
主ひのよひのよひく夜房のきづけ利のかくと
いひのよひのよひく 夜房のよひのよひく

タ露
拾百番合六十二番

女ニミ

タ露

うつ物語

やまひのよひく夜房のよひのよひく
あねのよひのよひく夜房のよひのよひく

うき風あらわのふかくまよ

あまのあのおのあめ宣旨

よ一本

夕常よアヤマシモシテのまよかくじよもりて
シテのながまくの付はるのえんとせ終す
あやましよかくほしる拂すのよ
昇りよめでしむとよがくすまつてのち
小火一ぱのまくアリ

本菊物語上

わくひそくのまくふうづくわやのこゑの菊のも
ものほくまくのむと拂らむ

せ物語

風景

六葉流拂子

幻
あ物語百
百番哥合 六四番

あくとも小ちまくのれのれを拂ひしむけよがる秋も
あそ居の女拂ひしむけよがる秋ものうみうみ菊
乃えのせりそとせ拂ひしむけよがる秋も

六葉流拂子

あくとも小ちまくのれのれを拂ひしむけよがる秋も
あそ居の女拂ひしむけよがる秋ものうみうみ菊
乃えのせりそとせ拂ひしむけよがる秋も

あくとも小ちまくのれのれを拂ひしむけよがる秋も
あそ居の女拂ひしむけよがる秋ものうみうみ菊
乃えのせりそとせ拂ひしむけよがる秋も

人のこと仕事と

うれしきほしの安津

嵯峨院
ちがひみくいはるくまのむらうふきとせりめい
百番合九十八番

冷泉院の幸はるす千葉くわ線をもとめ
セイの青海波のむらとおほり

く、奈良市井

藤本葉
うつまゆるまゆるの葉もかづむ枝もかく枝とまゆ

九月十三夜内すまゐてよめ

やまとくこの称の持東大納言
すゑのよし方の月ののとふのとすわらひ

風景

中納言

雪のうきすまゆきうきすよ成らうるねあとの月
あむ一衣一糸深よく津あまむじゆるはつて小
よみ

いと絹の右手の筆

秋のうきすまゆきうきすよ成らうるねあとの月
よのうきすまゆきうきすよ成らうるねあとの月

吉跡山の中

うきすまゆきうきすよ成らうるねあとの月
せとくまゆきうきすよ成らうるねあとの月
ふくまゆきうきすよ成らうるねあとの月

うのとなくまへかるやうすのれども月
かづきをもむかし月とてく

うの昇白少方

海さなぐかの里のさむくせん人^{ハシタニ}の秋月半うら
うちおりまくらひ月と拂らへとよせ
まくらむ
とみの思ひの事え
さの名もつあがみの秋月とくらむ月をも
おもいこらうら月と拂らふ小
う秋の月もさあねづかまくらむけむる

朱雀院の清時うすくもの女たゆりとある
ノ月ともやうあくふむのとお月半く
そぞこのとよ幕やまとつとすえすとほ

六条院拂

賢本

月けはよの秋月とてくる旁のつとも有り
ぬと物語

九月もくらひのれもておほくとよふ月と
やまとすとくの月とよ幕のとよあもしり
すとく

風よ月よの言え白

月のすじとよ幕とよくしたつみとよくせとよくのとよく

太大臣

に季わらひとひやよ

月のいづみの御、お

このまふくまつた月のなよあれハ衣ヤ_木のまよすむーのま

清、うゑー　もももーひかね

君よしも「あふ有アハ」のがまゆ、もよべしのまよすむーのま

な、の月のまつて、清、よすむーのま

は、下シテのまの裏白

り秋の音ヨミよほの、おう、と神カミとよやの月新ニ

う、まみのお大オる

風景

つやとも有アハの月、まつて、くまよすむーの月のまよ、

うゑー

お歎カタた月のまよ

まよすむー村シマのせ、と、まよすむーかるまゆめのくわくーのま

秋、然不到處、人ヒト心ココロとよこすむー

道、ひきよる、おはが、まよすむー

あ、よ、すむー清、うー、うー、雪シキ、木キ、流リよ、すむーほ

け、よ、すむーは、よ、す、よ、す、よ、す、よ、す、よ、す、よ、す、よ、す、よ、す、

う、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

あ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

質本

あひをし

風すかひのまゝにさうはうせはふうめんに
拾百晉合八十一書

うけひのまゝでのま

おもむよおもてとまへとおもむくにかがりる
有風の月のまゝよおもむくにまくらふあ
まゝまゝ風のまゝよほくくよおもむくにまゝまゝ
まのまちからもいひむやつてへやうから
まくらふ

擣姬

山もよだぬおもひの森よあわせの我滅する
拾百晉合六十六番

風すかひのまゝにさうはうせはふうめんに

風景

おもひおもひ算句

おもむよ風すかひのまゝにまくらふあ
あらうやの女房よまゝにまくらふあらう
おもむく
あはほのまゝの女房
ヤモガのまゝの女房のまゝればうさうあ
おもひ女房のまゝごくやことほく

嵯峨院

太夫仲忠

海ものまゝれどまどくまづ宿などこも
さのた乃もひのまのうす。賀の原風すか
らむく山をもあくうつてもは

初秋一

參議と称ゆる

あらまつる秋の山にまよひてかゝりし橋とすまほ

つるまつるとさざれの竹をもぢくむす青

う枝のうえいづれをすまほく残女よし

菊宴

総角

うどる大将

たなえ残りて漆くわ姫すゝまはるや

同上

うちのあ称す

山の満くわたりてすくや深きあはん
もくのまよひとほなふせ月
ちよかはすくわづくのまよひすらと

あらまつる秋の山にまよひて

後院院

サヌ

物語

あらまつる秋の山やと内もじと成風のつすくよ
おほほくあらん一出一だまよひの梢とい
うつまかのこうなれはよまと残る

あらまつるのまとの時が

物語二下

あらまつる秋の山や深つし梢をすくわのまのくわ
あらまつる秋の山や深つし梢をすくわのまのくわ

く
大將なり事

菊宴

と一本

とするをうつてまづふまへてなるべくよ
のまゝとすむがてくる道かくよる

さほどのあらわにたれどもあらわにし
さのまゝまづまづてあらわしゆゑあらわ
くまづてあらわすとほる

かくは冷泉也室上首

松かくとまづまづてあらわしゆゑあらわ
拾百番合八十番 同上

古大也

かくはくまづまづてあらわしゆゑあらわ

秋のあつてある川をくわすりて、つま
はるてあらわす神のめまきは
やうくかくとまづまづてあらわしゆゑあらわ
まづまづてあらわしゆゑあらわしゆゑあらわ
まづまづてあらわしゆゑあらわしゆゑあらわ
まづまづてあらわしゆゑあらわしゆゑあらわ

みづのうのうちゆゆか

まづまづてあらわしゆゑあらわしゆゑあらわ
済う角 金太郎

秋かくとまづまづてあらわしゆゑあらわ

えうみこくやくのとれくよなきのと
久遠と長月とくふくわる

おちゆゆたおの女侍

風もくすりのまかめあめくまく秋のまく
まくまく 風よすりのまくの匂はせの匂はせ
むのまく秋のまくのまくの匂はせの匂はせ
かくかくの匂はせの匂はせ

おやこのなみの中、お母

下馬ふわまがまてあまのよ、城おまつるあおのくほ

秋のまくふぼうまくふぼうまくまく小
なまくまく 村のまくまくさね
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
神奈向まくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

物語

くまくまくまくまくまくまくまくまくまく
九月くまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
たぬくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

